

秋田大学

アニメ『鬼滅の刃—那田蜘蛛山編』にあらわれる家
族観についての一考察

秋田大学教育文化学部

崔トウ

指導教員：市嶋典子 先生

目次

一、はじめに.....	3
二、先行研究.....	5
三、研究方法.....	8
四、アニメ『鬼滅の刃—那田蜘蛛山編』の中に出現した家族の絆と関連する部分.....	10
4.1 家族の絆の理解の異なり.....	10
4.1.1 定義：愛で結ばれた家族と利益で結ばれた家族.....	10
4.2 愛で結ばれた家族を守るために身を挺した兄と妹.....	11
4.2.1 定義：兄を救うために身を挺した妹.....	11
4.2.2 定義：妹を救うために身を挺した兄.....	12
4.3 利益で結ばれた家族.....	13
4.3.1 定義：利益で結ばれた家族の絆を結ぶ手段.....	13
4.3.2 定義：利益で結ばれた家族の役割.....	14
4.3.3 定義：伝統型意識を持つ蜘蛛鬼の非伝統型意識家族への認識.....	15
4.3.4 定義：非伝統型意識＋伝統型形態を持つ蜘蛛鬼家族.....	16
4.4 血の繋がり重視.....	16
4.4.1 定義：血の分有による姿の変換.....	16
4.4.2 定義：血の分有による利益交換.....	17
4.4.3 定義：本物の絆を求める途中で犯した誤り.....	18
4.5 本物の家族の絆を求める道.....	16
4.5.1 定義：本物の絆を求める途中で犯した誤り.....	18
五、アニメ『鬼滅の刃—那田蜘蛛山編』が示している家族の絆.....	20
5.1 アニメ『鬼滅の刃—那田蜘蛛山編』が表現した「家族の絆」.....	20
5.2 「家族観」の再考.....	25
六、結論.....	27
七、参考文献.....	27
八、参考映像.....	28

一、はじめに

アニメーションは日本の文化を海外に伝達する重要な方法である。日本の内閣府ウェブサイト¹によると、令和元年9月公開した「クールジャパン戦略」は「世界から「クール（かっこいい）」と捉えられる（その可能性のあるものを含む）日本の「魅力」、「食」、「アニメ」、「ポップカルチャー」などに限らず、世界の関心の変化を反映して無限に拡大していく可能性を秘め、様々な分野が対象となり得るとされる。世界の「共感」を得ることを通じ、日本のブランド力を高めるとともに、日本への愛情を有する外国人（日本ファン）を増やすことで、日本のソフトパワーを強化する。」を理念として日本の経済成長を実現するためのブランド戦略である。日本のポップカルチャーであるアニメーションも「クールジャパン戦略」の一部として海外に伝播された。そして、アニメーションは特別な窓口として、外国人に日本の社会と文化を提示している。

妖怪文化を題材にするアニメ作品は衰えず、特に近年公開されたアニメ「鬼滅の刃」は2019年のTwitterトレンド大賞のアニメ部門賞を獲得し、中国の動画サイトbilibili²で年度総再生量一位も獲得出来た。

アニメ「鬼滅の刃」が成功できたのは、アニメ番組の画面製作と声優の素晴らしい演出だけでなく、作者が書いた内容も読者の共感をよんだ成功の要因の一部である。多くの日本の漫画と比べると、「鬼滅の刃」の世界観は特別ではないが、この作品がアニメの人気頂点にたどり着いた主な理由は、作者が「鬼」の部分の意味深く設計し、主役たちの挫折と成長のリズムも適切なスピードで進んだからであると考えられる。アニメの中にある妖怪は日本の妖怪文化から誕生したが、アニメの中で再創作され、日本の妖怪文化を革新した。特別な視点から人類社会の様態を反映し、妖怪世界を人類の真実の世界に投影にした。この作品では、鬼も人間と同じ喜怒哀楽、悔みなどの感情を持ち、人間の心の世界を表現する媒介となっている。

アニメ「鬼滅の刃」は人々が自由に対するあこがれと、自分を超越続けることを望んでいることを示した。題材から言えば、「鬼滅の刃」の題材は伝統的な少年の修練成長や悪人を打ち負かすストーリーであり、どう考えても新意は欠けている。しかし、この中にあ

¹ https://www.cao.go.jp/cool_japan/about/about.html (2022. 5. 8 確認)

² bilibili は、中華人民共和国の動画共有サイトおよび生配信、ゲーム、写真、ブログ、漫画などのエンターテインメント・コンテンツ企業である。2016年にはテレビ東京と提携し、それ以降は正規コンテンツが配信されるようになった。

繊細な感情描写と主役の成長の長い道のりは観衆の強烈な共感を引き起こし、人々に熱情と感動を呼び起こした。この作品は家族の絆を描くことを重視して、兄妹の感情と親子の感情を描いた。アニメしか見ない視聴者以外の多くの人々にも愛され、日本の大人気作品になった。

筆者もこの作品が表現した多くの絆に感動し、作品に夢中になった。また、夢中になった絆は主役と係る感情の絆だけではなく、主役の敵である鬼の物語の中に表現された絆にも魅力があると思う。恋人と師匠の敵を討ったあと意志が完全に崩れて鬼になったキャラクターや生きるために窮地に追い詰められ危うく死ぬところだった過去がある鬼、様々な鬼の凶暴な外見の下に隠された彼ら自身の絆も魅力があると感じた。筆者の視点から見ると、アニメ『鬼滅の刃』の中で、一番特別な絆は、アニメ「鬼滅の刃」第十五話から第二十一話までの「那田蜘蛛山編」の中の家族の絆であると思う。「那田蜘蛛山編」の中にファンの中で「神回」と呼ばれた話も含んでいる。アニメ「鬼滅の刃」の中で相当な比重を占めている編である。この編が述べたのは、男の主人公炭治郎が仲間たちと悪鬼を討伐するために、蜘蛛鬼が潜んでいる那田蜘蛛山に入り、蜘蛛鬼である累と彼の家族との戦いが始まる話である。那田蜘蛛山のボスである累は炭治郎と違う家族観を持って、また、二人の家族観の衝突も「那田蜘蛛山編」の「神回」を引き出す基礎である。なぜ違う家族観のぶつかりから必ず相手を倒す程になるのか。一つの理由は鬼を討伐する鬼狩りと鬼が犬猿の仲のようなことであり、もう一つの理由は二人の家族観の衝突が深刻なことであると思う。この編を見る時、筆者は思わず、累と炭治郎の家族を比較することがよくある。炭治郎と禰豆子は血縁の家族の強い絆を観客に示した。それと対比すると、累は家族に対する態度は炭治郎より悪くなる。当初、筆者は累の家族は恐怖で結ばれた家族であると思ったが、ストーリーの進展につれて、累の家族が利益で結ばれた家族であるようになった。利益で結ばれた家族だろうが恐怖で結ばれた家族だろうが、どの家族の絆も愛で結ばれた家族で育った炭治郎が受け入れない家族である。そのような炭治郎と違う家族観を持つ鬼と彼の家族を倒すために、炭治郎と累との戦いの幕は開いた。

しかし、累と彼の家族が構成した家族は存在してはならないのか。累のような利益で結ばれた家族は現実の中でも実在しているのではないか。しかし、そのような形を持つ家族は一般的な考えで家族として認められないこともよくある。家族と言うと、多数の人が最初に思うのは愛で結ばれた家族である。多くの人がそう思うのは、世界中の家族は愛で結ばれる家族が一番多く、存在も合理的な性質を持つ家族であるからだ。

ところで、ほかのもので結ばれた家族は存在するのか。筆者の考えでは、少なくとも累の家族のような利益で結ばれた家族は存在していると考え。今の時代、家族の結び方は愛だけで結ばれるということではないと考える。社会の進歩と共に、人たちの関係も複雑になっている。このような環境の中に、一種類の家族の結び方しか存在しないのは不可能なことだと考える。それを論証するために、今回の論文は「那田蜘蛛山編」を研究対象として、家族の絆の中に利益で結ばれた家族の絆も実在している絆ということを明らかにしたいと考える。

二、先行研究

血縁関係は重要なのか。筆者は子供の頃によくたくさんのことを考えた。その中に、「もし自分は父と母の実の子じゃなかったならどうしよう」という心配をしていた。幸いなことに、それは杞憂であった。しかし、子供である自分は「父と母との血縁がない」ことを想像するだけでも悲しかった。当時の筆者は「血縁の繋がりがないと、両親に捨てられて外で死ぬかもしれない」と真剣に思っているが、大人になるにつれ、そのような心配がなくなった。なぜ成長したあと、両親との繋がりにこだわりがなくなったのか。筆者の考えでは、自分なりの考えができたあと、親に育ててもらった恩は血縁の繋がりより重要であることを意識した。筆者自身と親の感情は血縁関係より大切であると思っているからこそ、例え今筆者に親と血縁関係がないことが事実であるとして告げられても、自分は平常心で対応できる。血縁関係がなくても、強い感情が残され、血縁がない親はまだ自分の家族であると思える。

筆者の個人的な例から離れて、一般的な視点で「家族とは何か」と問われると、血がつながっている人であると言える。しかし、米村（2014, p24）は“血縁や血のつながりで表現される関係は、一見あまりに自明に思えるし、宿命的で絶対的にも見える。しかし、立ち止まって考えてみると、「血がつながっている」という表現自体も比喻であり、曖昧さを持っている。”と述べている。家族関係について、血縁関係は唯一の関係ではない。養子や里親などの関係も家族関係として承認されている。また、「家族」という言い方も時々形容詞になる。筆者は中国の大学で勉強した時、八人の学生寮に住んだことがある。ルームメイトたちといい関係を構築したため、よくほかの人に「家族みたいだ」と言われた。筆者とルームメイトたちは血の繋がりはないが、「家族」と言われたのは私たちが親しい様子を表現していることを意味する。どうしてほかの人は「家族」と私たちの関係を

形容するか、それは無意識の中に、数多くの人「家族」を一番親しい存在と認識しているからである。ニュースで時々親が子供を虐待する記事があり、人はそれを批判するときに「それでも家族か」「その家なんなの」と言う。「家族」や「家」などの単語は親密関係と関わることは普遍的な認識であると言える。米村（2014, p 27）によると、“「家」と血縁関係、親族関係は現実には重なることも多いので、「家」は血縁集団と考えられがちである。繰り返しになるが、「家」に関する議論からは、血縁を超える社会関係として「家」が考えられており、その上で、血縁の意味が問われていたのである。”と述べている。血縁関係がないとしても、家族になれることが示されている。日本で2016年10月11日から放送された、主人公二人の感情基礎がない“契約結婚”を軸に、様々な男女間の社会問題を表した『逃げるは恥だが役に立つ』というドラマは血縁関係と感情の基礎がない家族関係を構築するストーリーであった。ヒロインの森山は専業主婦を職業にして、就職という形で津崎と契約結婚をした。森山の考えでは、このような雇用形態は男女が逆でも成り立ち、需要と供給が結びつけばどんなところからでも仕事は生まれる。言わばこの二人が家族になる理由は感情と血縁と関係なく、ただの雇用関係から始まった結婚である。二人の家族関係の構築は利益だけの契約婚姻から始まり、利益で結ばれた家族になった。感情がないまま家族になった例はドラマの中にいる森山と津崎だけではなく、現実の中にも政略結婚などの利益のために家族になる例もある。

図1について、上野（1994）は“第I象限には居住と血縁とが一致した伝統型家族、第II象限には血縁が共通しているが世代分離をした家族、つまり別居や単身赴任家族が入る。第IV象限には非血縁関係者の同居、例えば子供のない夫婦や養子縁組が含まれる”と述べた。家庭は四種類の型に分けられる：I. 伝統型意識＋伝統型形態；II. 伝統型意識＋非伝統型形態；III. 非伝統型意識＋非伝統型形態；IV. 非伝統型意識＋伝統型形態（上野，1994）。

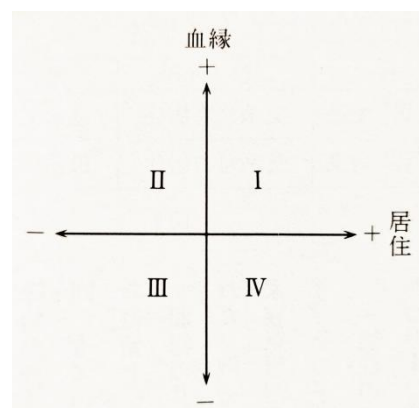


図1 『近代家族の成立と終焉』（上野，1994）

た日本の映画『万引き家族』も血縁がない家族たちを題材として作られた。主人公たちの家族は非伝統型意識＋伝統型形態の家族で、つまり伝統型意識の血縁関係以外の家族関係を認め、伝統的な家族のように家庭を作ることである。このような家庭の構成はどこでも見える形ではないからこそ、人に警戒される。「利益のために集まった家族」と聞くと、「これは家族じゃないでしょう」と思うだろう。しかし、映画を見た後、「その人たちも

家族だ」と考えを変える人も多い。筆者は映画の中で誘拐容疑で逮捕された柴田信代が警察の質問に対して反論する台詞「産んだら皆母親なの？」が一番印象深い。これは伝統的な血縁関係だけを認める家族観に対する挑戦だと考える。今現在の社会は日々進歩して、進歩がもたらす新しい思想も絶えず生まれている。複雑になりつつある世界では、家族の定義も複雑になり始め、血縁関係だけを通じて家族を定義するのは通用しない方法と考える。(暴, 2019) は「1990 年代初頭からの日本経済の長期低迷、少子高齢化による人口減少により、日本人の家族認識は多様化している。家族としてのアイデンティティを持っているかどうかで、家族になれるかどうかが決まる。どのような物質的な共同体形態であっても、構成員の間に家族としてのアイデンティティがあり、それを維持しようとするれば、家族を構成することができる。同一の家族の自己承認意識のもとで、人々は異なる形態の家族を構成することができる」(pp. 134 - 136 : 筆者訳) と述べている。複雑な社会環境ではもっと複雑な問題が発生し、誰もが触れる「家」は言うまでもない。多くの人が多かれ少なかれ悩んでいる。これらの悩みはお金と関係があるかもしれないし、名誉と関係があるかもしれない。自分の利益問題やニーズを解決するために、問題を解決できる人や解決策を探している人がいて、利益で結ばれた家族もその間に誕生した。彼らが家庭を作る動機にも合理性があり、利益で結ばれた家族形態を否定してはいけない。是枝裕和監督にとって、血縁は家族の第一の要素ではない。彼は「選択」という概念を表した。「この家で、これらの散発的な個体は庇護を欲しがっていないわけではないが、定常的で、暖かい家庭は庇護を与えることができる。不安定で、無関心で、暴力的な家庭は庇護を与えることができない。彼らが構築したこの家は、完全な家に対する「擬態」であり、昆虫が自分を別の形にシミュレートするように、より生存しやすい」(苏, 2018, pp. 60 - 62 : 筆者訳)。「万引家族」の信代さんはおばあちゃんを選択し、友里さんはこの家を選択できたこそ、彼らの家族は成り立っていた。「家」を求める人や、家もたらすメリットを求める人にとっては、伝統的な血縁の家族を強制的に受け入れるよりも、その人たち自身が適切だと思う人を家族として選ぶほうがいい。血縁上の家族を選ぶ方法はないが、自分の判断で自分の家族を認定することができる。

中臺 (2015, pp. 148-171) によると、“『曾根崎心中』『心中天の網島』『心中二枚絵草紙』『生玉心中』『心中宵庚申』の分析を通し、「家」を衰退させる可能性が高い人間であっても、血縁であれば血縁優遇の心性が優先され、「家」から排除されないとする認識が民衆に共通してあったこと、非血縁の場合では「家」存続を重視する心性が先行さ

れ、「家」にとって益にならないと判断されると、「家」から排除されると意識されたことを示した。いわば、血縁優遇か、「家」存続重視かというどちらか一方ではなく、民衆はその両方に共感を示していたことを近松世話物から明らかにした。”と述べた。この部分の主旨は「家の存続は血の繋がりより重要である」と示している。言わば家のために、自分と血縁がない個体を選ぶことである。このように血の繋がりがない家族を選ぶことはアニメ『鬼滅の刃—那田蜘蛛山編』の中でも表現されている。血の繋も感情の基礎もない家族を作った蜘蛛鬼である累は本物の絆を構築するために、自ら家族を選択し、家族制度を持っている家庭を作った。

「家族制度とは、家長制度である。一家の中は必ず家長といふものが立々あるから、家族制度は家長制度である。家長が一家を統率して行くといふ組織である」（岡田，1928，pp. 124）。蜘蛛鬼家族以外の人から見れば、父蜘蛛鬼は家族の統率として蜘蛛鬼家族を管理しているが、実際的には、蜘蛛鬼家族の家長は蜘蛛鬼家族の一番年下の弟役の累である。父蜘蛛鬼は表面的な家長になることも累の命令に従った結果である。累はそのような命令を下した目的も伝統型意識＋伝統型形態の家庭関係を作るためである。本物の絆の中の保護される方になりたいので、累は父蜘蛛鬼を家長にする家族制度を作った。一方、累と血縁関係がない鬼たちは自身の命を守るために、累の家族になる道を選択した。蜘蛛鬼たちが構築している家は感情の基礎がなく、ただ各自の利益のために家の形を維持している。累は自分の目的のために、感情抜きで感情がない非伝統型意識＋伝統型形態を持つ家族を作った。このような蜘蛛鬼家族は主役の炭治郎たちと出会い、妹禰豆子の争奪戦をきっかけとして、累と炭治郎の家族観のぶつかりと利益で結ばれる家族と愛で結ばれる家族の違いが見られる。本稿では血の繋がりがなく感情の基礎がない家族としての蜘蛛鬼家族と、その家族作った蜘蛛鬼—累を中心として注目する。その上、利益で結ばれる家族がアニメの中に反映された形から出発し、アニメの中に示している愛で結ばれる絆と利益で結ばれる絆の特徴を対比し、「家族観」に対する再考を行いたい。

三、研究方法

本研究では、アニメ『鬼滅の刃—那田蜘蛛山編』の内容を用いながら、血の繋がりがなく感情の基礎がない家族としての蜘蛛鬼家族と、その家族作った蜘蛛鬼—累を中心として分析する。さらに、アニメの中で示されている愛で結ばれる絆と利益で結ばれる絆の特徴を対比し、「家族観」に対する再考を行う。

まず、アニメ『鬼滅の刃―那田蜘蛛山編』の中「家族の絆」と関連している部分を注目したいと考える。関連している部分は四つの種類がある：1、炭治郎と累の家族観念が起こした衝突；2、炭治郎と禰豆子の愛で結ばれる家族の絆；3、累と彼の家族の利益で結ばれる家族の絆；4、累が求めている家族の絆である。次にアニメの中に四種類の「家族の絆」と関連している部分と関わるシーンを分類する。そして、それぞれシーンについて内容とシーンが持っている深層な意味を分析する。本論文の分析データの中に注目したいキャラクターは四名いる：炭治郎、累、姉蜘蛛鬼、A 蜘蛛鬼である。

この A 蜘蛛鬼は累の蜘蛛鬼家族であり、一般大衆が持っている愛で結ばれる家族の家族観と似ている家族観を持っている。そのキャラクターはアニメと原作の中にも名前の紹介がない、ゆえに本論文は「A 蜘蛛鬼」という呼び方を用いる。

まずは炭治郎と累の家族観念が起こした衝突の部分である。この部分は二つのシーンがある。①父蜘蛛鬼と戦いの途中、女性の泣き声を聞いた炭治郎は、累が姉蜘蛛鬼を傷めていた場面を見た。②「本物の絆」を追求している累は命かけて兄を守った禰豆子を自分の家族にしたいので、妹の傷を心配している炭治郎に妹を譲る話しをした。二つのシーンの中に、累と炭治郎は二人の家族観を話の中に含んだ。累は主に家族が利益で得られることと恐怖の絆で家族を作ること主張している。しかし、炭治郎の主張では、家族は愛で結ばないといけないことである。シーンの中に累と炭治郎の言行と反応を分析し、2人が持っている家族観を明らかにする。

次に炭治郎と禰豆子の愛で結ばれる家族の絆を表している二つのシーンである。①累の攻撃を避けきれない炭治郎を守るために、禰豆子が炭治郎が背負っている箱から飛び出して、兄を守った。②疲れた炭治郎は累に窮地に追いつめられ、走馬灯の中に亡くなった父親が踊った神楽を思い出し、その踊り方に基づいて、新しいわざを使って改めて累に対抗した。ここの炭治郎と禰豆子は相手のために、命をかけるまで頑張っている。ゆえに、ここは二人の行動に注目し、彼たちがそうする動機と理由を解明する。

三つ目は累と彼の家族の利益で結ばれる家族の絆を表しているシーンである。この部分は五つのシーンがある。①累は禰豆子が欲しいと言った後、累の隣にいる姉蜘蛛鬼は捨てられたくない気持ちで、慌てて自分こそが累の姉だと言ったが、怒った累に首を糸で切断され、まだ役割を果たしたいなら山の中の人間を殺してこいと命じた。②A 蜘蛛鬼と姉蜘蛛鬼は累が母蜘蛛鬼を叱責している場面を見ながら話している。③姉蜘蛛鬼は累の血を飲んだ後、正式的に累の家族になった。姉蜘蛛鬼を含めて、蜘蛛鬼家族全員が普通の家族の

順位に座りながら食事しているの様子をしているシーンである。④母蜘蛛鬼は累の血を適応する能力はほかの蜘蛛鬼家族より低い、よく累の家族の顔をうまく維持できなくて前の顔に戻る。累は糸で母蜘蛛鬼の首を絞めて罰を与え、同時に累の血が糸に沿って母蜘蛛鬼の傷を通じて、母蜘蛛鬼の血と融合し、母蜘蛛鬼はもう一度累と似ている顔に戻った。⑤姉蜘蛛鬼は累の家族になる前の事を思い出した。彼女は鬼殺隊に追われた時、累は彼の家族になるを条件として彼女を救った。鬼狩りが怖くて集まっていた累の家族がたくさんいたが、累の要求に従わないと、すぐにひどい仕打ちを受ける。これらをふまえ、累の家族を構成する形とその形が形成した理由をあきらかにする。

最後は累が求めている家族の絆のシーンである。累は人間だった頃、生まれつき体が弱かった。その累を救ったのは鬼の始祖――鬼舞辻無惨だった。日の光に当たれず、人を食う累に対して、彼の父は絶望し、母は毎日泣いた。累は川で溺れた子供を助けて親が亡くなった話を聞き、親の愛と絆に感激した。累の両親は、人を殺した累を殺そうとした後、自殺しようだが、累は両親の殺意を感知し、両親を殺し本物の親子の絆を切った。このシーンに注目し、累の親の行動方法と累が求めている本物の絆を分析対比し、累の親が累に対する絆の形を分析する。

四、アニメ『鬼滅の刃―那田蜘蛛山編』の中に出現した家族の絆と関連する部分

アニメ『鬼滅の刃』は悪鬼が横行する世界で、主人公竈門炭治郎の家族全員が悪鬼に殺され、妹の竈門禰豆子だけが鬼になって生きてきたが、炭治郎は妹を元の姿に戻すために鬼殺しの旅に出る話である。アニメ『鬼滅の刃―那田蜘蛛山編』は、那田蜘蛛山に向かう竈門炭治郎たちは蜘蛛の能力を持っている鬼である累とその家族のことを発見し、鬼を消滅するために、累と死闘を繰り広げる物語である。以下では、炭治郎と累の家族観念が起こした衝突、炭治郎と禰豆子の愛で結ばれる家族の絆、累と彼の家族の利益で結ばれる家族の絆、累が求めている家族の絆四種類の「家族の絆」について注目し分析をする。

4.1 家族の絆の理解の異なり

4.1.1 定義：愛で結ばれた家族と利益で結ばれた家族

具体例：

炭治郎は父蜘蛛鬼と戦いの途中で、女性の泣き声を聞いて、その方へ向かったあと、蜘蛛鬼のボスである累が姉蜘蛛鬼を傷めつけていた場面を見た。

累：「何見てるの、見せ物じゃないんだけど。」

炭治郎：「な、何しているんだ？君たちは仲間同士じゃないのか？」

累：「仲間？そんな薄っぺらなものと同じにするな。僕たちは家族だ。強い絆で結ばれているんだ。それにこれは、僕と姉さんの問題だよ。よけいな口だしするなら、きざむから。」

炭治郎：「違う、家族も仲間も、強い絆でむすばれていれば、どちらも同じように尊い。血の繋がりがなければ薄っぺらだなんて、そんなことはない！それに、強いきずなで結ばれているものには、信頼のにおいがする！けどお前たちからは、恐怖と憎しみと嫌悪の匂いしかしない！こんなものを絆とは言わない！まがい物！偽物だ！」

考察：

愛で結びつく家族の中で育った炭治郎は累の仲間を傷つける行為、あるいは家族を傷つける行為はあり得ないことだと思う。炭治郎の意識の中で認識した「家族の絆」は自分の命より重要なものである。愛に囲まれた家族の中で育った炭治郎はいつも自分の家族を無条件に愛した。ゆえに、累の感情がない、利益中心とした家族モデルに接触した後、納得できない彼がどうしても自分の話を撤回しない。累と姉蜘蛛鬼の間に愛の匂いもないことを含めて、炭治郎は累の家族の絆は偽物であると考えた。

炭治郎の理解では、家族同士はお互いを守って、愛を相手に伝えることが家族の絆である。しかし、累は利益と恐怖で自分が作った家族を管理している。これは根本的な異りである。累の意識の中で、「仲間」の絆は「家族」より弱い。そして自分の絆は「仲間」の絆に思われた。累の認識では、自身の絆は本物だ。そう思う理由は、累は自分の力を条件として、他の鬼と交換した後、家族を得た。この過程に、累と他の鬼はビジネスパートナーのように、利益交換を行った。累はそれを家族を作る手段として認識し、合理的な行動であると思ったからであると言える。

4.2 愛で結ばれた家族を守るために身を挺した兄と妹

4.2.1 定義：兄を救うために身を挺した妹

具体例：

累は糸を使って彼の家族観を侮辱した炭治郎を切り裂こうとした。避けきれない炭治郎を守るために、炭治郎の妹である禰豆子が炭治郎が背負っている箱から飛び出して、兄を守った。妹は兄を救うために身を挺した場面を見た累は驚いた。

炭治郎：「禰豆子、禰豆子！兄ちゃんをかばって、ごめんな。」

姉蜘蛛鬼：「背負っている箱から女の子が……でも、気配が鬼だ。」

累：「お前…それ…その女…兄弟か？」

炭治郎：「だったらなんだ！」

炭治郎の考え：「傷が深い、左手首がちぎれそうだ。早く治れ！早く治れ！早く治れ！」

累：「兄弟…兄弟…妹は鬼になってるな…それでも一緒にいる…妹は兄をかばった、身を挺して…本物の絆だ！欲しい！」

4.2.2 定義：妹を救うために身を挺した兄

具体例：

疲れた炭治郎は累に窮地に追いつめられ、走馬灯の中に亡くなった父親が踊った神楽を思い出し、その踊り方に基づいて、新しいわざを使って改めて累に対抗した。

炭治郎：「火の神神楽！園舞！」

累：「糸が！」

炭治郎：「止まるな！走り続けろ！今止まれば水の呼吸から火の神神楽の呼吸に無理やり切り替えたは跳ね返りがくる！そうしたら、俺はしばらく動けなくなるだろう。だから！今やらなければ！走れ！禰豆子を守るんだ！」

累：「こいつ！」

炭治郎：「見えた！隙の糸！今ここで倒すんだ！例え相打ちになったとしても！」

禰豆子の夢の中で

禰豆子の母親：「禰豆子、禰豆子。起きて、禰豆子。お兄ちゃんを助けるの、今の禰豆子ならできる。頑張って。お願い、禰豆子。お兄ちゃんまで死んでしまうのよ。」

目が覚めた禰豆子：「血鬼術、爆血！」

累：「ばかな！糸が焼き切れた！」

炭治郎：「俺と禰豆子の絆は、誰にも引き裂けない！」

考察：

上記は、累が絆で結んでいる家族をかばうために身を挺するこそが本物の絆を体現するところである。累が鬼になっていらいずっと欲しがっていた家族の絆は、炭治郎と禰豆子のような命をかけて血を繋いでいる家族を救う絆である。これは累が川で溺れた子供を助けて親が亡くなった話を聞いたあと生じた家族の絆への憧れである。愛で結ぶ家族の中に育った炭治郎と禰豆子は自分の家族を守るために、命をかけているように必死に頑張ることを表現した。つまり、炭治郎と禰豆子の意識では、自分の命より、家族を守るほうが大切なことを意味している。

4.3 利益で結ばれた家族

4.3.1 定義：利益で結ばれた家族の絆を結ぶ手段

具体例：

「本物の絆」を追求している累は命かけて兄を守った禰豆子を自分の家族にしたいので、妹の傷を心配している炭治郎に妹を譲る話しをした。

累：「坊や、話をしよう、出ておいで。」

炭治郎：「坊や？話し？」

累：「僕はね、感動したんだよ。君たちの絆を見て体が震えた。この感動を表す言葉はきっとこの世にないと思う。でも君たちは僕に殺されるしかない。悲しいよね、そんなことになったら。でも一つだけ、それを回避する方法が一つだけある。君のその妹、君の妹を僕にちょうだい。おとなしく渡せば、命だけは助けてあげる。」

炭治郎：「何を言っているのかわからない。」

累：「君の妹には僕の妹になってもらう。今日から。」

炭治郎：「そんなことを承知するはずないだろう。それに禰豆子はものじゃない！自分の思いも意識もあるんだ！お前の妹になんてなりはしない！」

累：「大丈夫だよ、心配いらぬ。絆をつなぐから、僕のほうが強いんだ。恐怖の絆だよ。逆らうとどうなるか、ちゃんと教える。」

炭治郎：「ふざけるのもだいがいにしろ！恐怖でかんじからめしぱりつけることを家族の絆とは言わない！その根本てきな心意気を正さなければ、お前のほしいものは手には入れないぞ！」

累：「鬱陶しい。大声出さないでくれる？合わないね君と。」

炭治郎：「禰豆子をお前なんかには渡さない。」

考察：

禰豆子の兄をかばった行為は累がいつも欲しがっていた本物の絆である。そして、累の家族を作る手段は利益交換で脅かすしかない。ゆえに累は禰豆子を奪おうと思った。累が求めている絆もこのような家族のために命でも捨てできる絆である。しかし、このような絆は愛で結ぶ絆の中によくある事だが、累はこれが愛から出発することに気付かなかった。また、累はこの絆を手に入れたいという考え方も昔のように、炭治郎と取引を通じて、禰豆子を自分の家族にし、或いは直接禰豆子奪って家族になることを意味する。「奪う」というこの動詞を使う理由は、累の家族作り方と炭治郎の愛で家族を作る観念と衝突し

て、愛で絆を結ぶ人から見れば、これは確実な「奪う」である。詳しく説明すると、累の視点から見ると、彼の行為は合理的な家族をつくる方法である。彼は炭治郎より強いので、禰豆子は炭治郎の妹になるより累自身の妹になった方が利益があると累はそう判断した。しかし、炭治郎と禰豆子は累の無感情な家族作り方を認めない。炭治郎と禰豆子の認識でそのようなやり方は合理性もなく、「奪う」としか思えない。

この大声が含めている意味は炭治郎の累の家族作り方への怒りと愛以外の手段で家族の絆を結ぶことに対しての信じられない気持ちである。これは二人の思想の違いであると考ええる。ここの「累に妹を譲る話」の炭治郎に対する効果は、最初の時の「炭治郎は累に彼の家族は偽物だという話」の累に対する効果は同じだと考える。累は自分の家族観から出発し、累自身が家族について納得できる話を炭治郎に言った。しかし、累と家族観が違う炭治郎から聞くと、累の話は彼を侮辱していると同様である。炭治郎が最初に累と会った時の話も同様である。愛で結ばれる家族を持つ炭治郎は累の家族観が理解できない。ゆえに炭治郎は累に累の絆は偽物のような話を言い出す。その話は累から聞くと、その話は彼の家族観を侮辱しか思えない。

この二つのシーンは、二種類の家族観を代表している累と炭治郎が相手の観念を言葉で攻撃していることである。

4.3.2 定義：利益で結ばれた家族の役割

具体例：

累は禰豆子が欲しいと言った後、累の隣にいる姉蜘蛛鬼は捨てられたくない気持ちで、慌てて自分こそが累の姉だと言ったが、怒った累に首を糸で切断され、まだ役割を果たしたいなら山の中の人間を殺してこいと命じた。

姉蜘蛛鬼：「ちょ、ちょっと待って！待ってよ、お願い！私が姉さんよ！姉さんを捨てないで！」

累：「黙れ！」

累：「結局お前たちは自分の役割もこなせなかった。いつも、どんな時も。」

姉蜘蛛鬼：「ま、待って…ちゃんと私お姉さんだったでしょう？挽回させてよ！」

累：「だったら今山の中をちょろちょろする奴らを殺してこい。そうしたら、さっきのことも許してやる。」

姉蜘蛛鬼：「わ、分かった。殺してくるわ。」

考察：

累が思っている家族が果たすべきの役割は「自分のために命まで捨てること」のである。彼は十二鬼月³の一人として、蜘蛛鬼家族の中で一番強い鬼である。しかし、ほかの十二鬼月である鬼は鬼になったあと家族を作る行動は一切ない、ゆえに累の家族を作ることは更に特殊なことになった。そのような強い実力を持っている累がしたことは蜘蛛鬼家族を守るのではなく、彼より弱い蜘蛛鬼に彼を保護することを求めている。累のような強い鬼は決して怖いなどの理由で弱い鬼に保護を求めないので、彼がこうした理由はほかの蜘蛛鬼との利益交換と関わると考える。累は強い力をほかの蜘蛛鬼に分けて、かわりに累を必死に守ることは蜘蛛鬼達の役割になった。しかし、鬼家族たちは命を捨てるほど彼を守っていなかった。そのことに基づいて、累は姉蜘蛛鬼たちが役割をこなせなかったと認識している。

4.3.3 定義：伝統型意識を持つ蜘蛛鬼の非伝統型意識家族への認識

具体例：

以下は「一般的な考えを持っている累の家族」を「A 蜘蛛鬼」と呼ぶ。昔の時に、A 蜘蛛鬼と姉蜘蛛鬼は累が母蜘蛛鬼を叱責している場面を見ながら話している。

A 蜘蛛鬼：「ただのままごとよ。」

姉蜘蛛鬼：「え。」

A 蜘蛛鬼：「血の繋がりなんかない、寄せ集めの家族だもん。」

(中略)

A 蜘蛛鬼：「皆鬼狩りが怖くて、仲間が欲しかっただけ。何もこんな意味不明な家族ごっこがしたいわけじゃないのに。累の要求や、命令に従わないものは切り刻まれたり、知能を奪われたり、吊るされて日光に当てられる。もうたくさんよ。」

考察：

A 蜘蛛鬼の考えは炭治郎の家族観と接近し、この利益と恐怖しかない蜘蛛鬼家族は「家族愛」が存在しない、本物の家族ではないと述べている。彼女の考え方は伝統型意識＋伝統型形態と考える。彼女の台詞を分析すると、彼女が認識している家族は血のつながりがある以上、家族の間も感情があるべきである。事実から言えば、累の蜘蛛鬼家族は血のつながりがある。しかし、ここの A 蜘蛛鬼は血のつながりがないと述べた。彼女が言いたいのは、この家族は血の繋がりがなく、足りないのは血の繋がりの背後の意味で

³ 十二鬼月：鬼の首領鬼舞辻無惨が選んだ鬼たちの精鋭の総称。「上弦」と「下弦」の2つに分けられ、それぞれに6名の鬼がある。

ある。A 蜘蛛鬼はすでに累の家族になったとしても、家族観について累と異なっている。ここでも累の家族は非伝統型意識＋伝統型形態を持つ蜘蛛鬼家族のことを側面から表している。

4.3.4 定義：非伝統型意識＋伝統型形態を持つ蜘蛛鬼家族

具体例：姉蜘蛛鬼は累の血を飲んだ後、正式的に累の家族になった。次のシーンは姉蜘蛛鬼を含めて、蜘蛛鬼家族全員の座席の順番である。このシーンの中に、最上位に座っているのは父蜘蛛鬼である。彼の下の位置に座っているのは母蜘蛛鬼と兄弟姉妹の蜘蛛鬼。その蜘蛛鬼たちを管理している累は一番年下の弟として末に座っている。しかし、一見ご飯を食べているように一緒に座っている蜘蛛鬼家族の目の前に置いているボウルは、ボロボロで何もない状態である。

考察：

蜘蛛鬼家族の家族関係の構成を明らかに表現したシーンと考える。最初に注目すべき物は、ボロボロで空いているボウルである。筆者の考えでは、一般的にボウルがボロボロになっても使い続ける理由は三つある：1、新しいボウルを買うお金がない；2、ボウルはまだ価値がある；3、ボウルの状態を気にする人はいない。このシーンのボウルにふさわしい解釈はボウルの状態を気にする人はいないと考える。愛で結ばれる家族なら、家族の生活質量も考慮する。しかし、蜘蛛鬼家族はもうすぐ倒壊になりそうな屋敷の中にボロボロなボウルを並んで、何も食べない。これは蜘蛛鬼家族の「ただのままごと」の本質を暗示している。つまり、ままごとの様子がなくなると、利益で結びつく家族の姿は隠せないまま、人に知られる。また、このシーンの蜘蛛鬼たちが座っている順位も普通の家族の順位である。父蜘蛛鬼は最上位に座って、次は母蜘蛛鬼と兄弟姉妹の蜘蛛鬼。その蜘蛛鬼たちを管理している累は弟として末に座っている。累以外の蜘蛛鬼に対して、この家族の精神的なリーダーは累である。つまり、上位に座る鬼は累のはずである。しかし、シーンの中では、累は最下位に座っている。言い換えれば、蜘蛛鬼家族の座る席を決める鬼は累である。これは蜘蛛鬼家族の家族非伝統型意識＋伝統型形態の型を表現し、または役割の配分と関わり、累は蜘蛛鬼たちが彼らの役割をこなすという要求も暗示した。

4.4、血の繋がりの重視

4.4.1 定義：血の分有による姿の変換

具体例：

母蜘蛛鬼は能力が弱い鬼なので、累の血を適応する能力はほかの蜘蛛鬼家族より低い、よく累の家族の顔をうまく維持できなくて前の顔に戻る。累は糸で母蜘蛛鬼の首を絞めて罰を与え、同時に累の血が糸に沿って母蜘蛛鬼の傷を通じて、母蜘蛛鬼の血と融合し、母蜘蛛鬼はもう一度累と似ている顔に戻った。

母蜘蛛鬼：「ごめんなさい、ちゃんとします。累。練習します、許して。ごめんなさい、上手にできなくて。時々戻ってしまうんです。」

累：「言い訳はいいよ、お母さん。ちゃんと母さんをやって。」

母蜘蛛鬼：「分かっているわ、累。」

4.4.2 定義：血の分有による利益交換

具体例：

姉蜘蛛鬼は累の家族になる前の事を思い出した。彼女は鬼殺隊に追われた時、累は彼の家族になるを条件として彼女を救った。鬼狩りが怖くて集まっていた累の家族がたくさんいたが、累の要求に従わないと、すぐにひどい仕打ちを受ける。

累は自分の血を水に入れた。

ほかの蜘蛛鬼家族：「飲んで。私たち家族の能力は全部累のもの。皆弱い鬼だったから、累の力を分けてもらったの。累はあの方のお気に入りだから、こういうことも、特別に許されているのよ。」

まだ累の家族と同じ姿になっていない姉蜘蛛鬼は血を混ぜている水を飲んだ。

累：「感じるかい。もう鬼狩りなんかを怖がることはないんだ。さて、仕上げをしよう。」

累は苦しいそうな姉蜘蛛鬼の顔の皮を剥いた。姉蜘蛛鬼は累の家族と似ている顔になった。

累：「さあ、おもてをお上げ。おめでとう、これで本当の家族だ。」

考察：

『鬼滅の妖異学』を記した諏訪（2022, p115）は“鬼には「鬼の家」ともいうべき居場所は存在しないとする。無惨の血の形質は、血縁も家族的関係も生み出すことができない。累は無惨の血を使って疑似的な家族を作ろうとするが、そこでは恐怖や力による威嚇が関係性を支配している。”と述べた。しかし、累の意識には、彼の血を飲んで、技や顔などの特徴が彼と似れば血縁関係を持つ家族になるというものがある。累から見ると、彼と血縁関係しか持っていない家族になる場合に、彼のために身を挺することができる。つまり、累が追求しているのは伝統型意識＋伝統型形態の家族である。累の考えでは、愛で結ばれ

る家族のように血がつながっていれば、相手は累自身の家族として累のために犠牲になる。しかし、実際には彼の家族の構成は非伝統型意識＋伝統型形態の形である。上記の『鬼滅の妖異学』が書いているように、累と彼の家族は血の繋がりが無い家族である。そして、蜘蛛鬼家族は血の繋がりが無いまま家族の構成を構築した。利益で結ばれた蜘蛛鬼家族は愛で結ばれる家族と違い、彼たちがもらった利益は命をかける程度にたどり着けない。

家族たちには、血を飲むことは強くなれるとみなされている。弱い鬼に対して、命を保証できることは一番優先されることだ。つまり、累の血を飲んで、累の家族になるシーンも、累と彼たちの家族が利益を交換している意味が含まれている。

4.5：本物の家族の絆を求める道

4.5.1 定義：本物の絆を求める途中に犯した誤り

具体例：

累は人間だった頃、生まれつき体が弱かった。その累を救ったのは鬼の始祖――鬼舞辻無惨だった。日の光に当たれず、人を食う累に対して、彼の父は絶望し、母は毎日泣いた。累は川で溺れた子供を助けて親が亡くなった話を聞き、親の愛と絆に感激した。累の両親は、人を殺した累を殺そうとした後、自殺しようだが、累は両親の殺意を感知し、両親を殺し本物の親子の絆を切った。

累：「俺は体が弱かった。生まれつきだ。走ったことがなかった。歩くのでさえも苦しかった。無惨様の現れるまでは。」

無惨：「可哀想に、私が救ってあげよう。」

累：「両親は喜ばなかった。強い体を手に入れた俺が、日の光にあてれず、人を食わねばならないから。」

累の父親：「なんてことを…なんてことをしたんだ、累！」

累：「昔、素晴らしい話を聞いた。川で溺れた我が子を助けるために死んだ親がいたそう。俺は感動した。何という親の愛、そして絆。川で死んだその親は、見事に“親の役目”を果たしたのだ。それなのに、なぜか俺の親は、俺の親は俺を殺そうとした。母親は泣くばかりで、殺されそうな俺を庇ってもくれない。偽物だったのだろう、きっと、俺たちの絆は本物じゃなかった。」

累の母親：「ご…めんね。」

累：「何か言ってる、まだ生きてるのか…」

累の母親：「丈夫な体に生んであげられなくて…ごめんね…」

累：「その言葉を最期に、母親は事切れた。死んだ。」

累の父親：「大丈夫だ累、一緒に死んでやるから…」

累：「殺されそうになった怒りで、理解できなかった言葉だったが、父は俺が人を殺した罪を共に背負って、死のうとしてくれていたのだと、その瞬間、唐突に理解した。本物の絆を、俺はあの夜、俺自身の手で切ってしまった。」

考察：

実際に、累が両親を殺した時に意識した本物の絆は愛の絆だった。そして累は家族を挽回するために、家族作りを始めた。累が鬼になる前聞いた川で溺れた子供を助けて親が亡くなった話の中にあつた「親の役目」を果たした親のような家族を作りたいと考えた。しかし、累が気づいたのは、親が命がけで子供を救うという行為だけである。彼は親と子供の中に存在している家族の愛を気づかなかつた。ゆえに、累の家族観はだんだん愛の方向から離れ、利益を中心する家族観の構築が始まつた。

五、アニメ『鬼滅の刃—那田蜘蛛山編』が示している家族の絆

5.1 アニメ『鬼滅の刃—那田蜘蛛山編』が表現した「家族の絆」

家族観と家族の形について	家族の絆を実現するために必要なこと	家族の絆は一番尊いな絆なのか	自分と家族が危険に陥る時はどうすべきか	炭治郎と累の考えの家族の形	実際の家族の形
炭治郎	互いを信頼すべきこと	家族も仲間も、強い絆でむすばれていけば、どちらも同じように尊い	互いに全力を尽くして相手を守るべきだ	伝統型意識 + 伝統型形態	伝統型意識 + 伝統型形態
累	相手は自分に利益をもたらし、あるいは自分の目的を満たすことができる	自分と実質的な血の繋がりがあある絆が一番尊い、それ以外の絆は信用できない	自分は自分が作った家族の中の一員守られるべきの位置にいて、ほかの家族は自分を守る役割がある	伝統型意識 + 伝統型形態	非伝統型意識 + 伝統型形態

表1 アニメ『鬼滅の刃—那田蜘蛛山編』が表現した「家族の絆」

上記の表は炭治郎と累の家族観と家族の形について分別に記入した。炭治郎は家族の間に互いを信頼し、強い絆でむすばれていけば、互いに全力を尽くして相手を守ることができると考えている。彼の家族観は愛を中心にする家族観であり、家族の感情を重視している。それに反して、累の考えでは、利益交換を通じて累と血の繋がりがあある家族は累を守

る役割がある。累の利益を中心にする家族観は感情より利益を優先して考える。

絆は人々の繋がりであり、強い結びつきのことである。『鬼滅の刃―那田蜘蛛山編』の中で、二種類の家族の絆を表した。一つは炭治郎と禰豆子のように助け合って、前向きな描写で書いた家族の絆であり、もう一つは、利益に基づいて構築された偽善的な家族の絆である。二つの家族の絆がこのような強烈な対比になれる一つの理由は、二人が対話をする時に、異なる考えから生み出したセリフの衝突に明らかな区別がある。この区別があるのも、二人が家族の絆について異なる理解があるということである。

かつて、マザー・テレサ⁴は取材された時に家族について、ある名言を言ったことがある。「What can you do to promote world peace? Go home and love your family.」（世界平和のためにできることですか？家に帰って家族を愛してあげてください）（筆者訳）。これは家族のことを重視し、互いの愛を込めて家族の絆を構築すべきという意味であると考えられる。この名言とみなされている言葉の中に含まれている意味は、炭治郎の家族観と一致している。炭治郎の家族観はマザー・テレサのそれと同じように当たり前のように、多くの人に認められている。

しかし、注意すべきなのは、炭治郎の家族観と違っている累の家族観が間違っているのかという点である。ここで、筆者は累の家族観も家族観のある一種類だと考える。時代の変化と共に、家族の形は多様化し、このような発展の下に異なる家族に対する認識も出現したのだと言える。表面から見れば、累の家族観は伝統的な血縁関係を求めている。しかし、本質を見ると、彼の家族観の正体は相互利用の関係で自分と家族の繋がりを維持していることである。

蜘蛛鬼家族の実質は利益を中心にする家族とは言え、見た目は愛で結びつく家族を真似しているところもある。姉蜘蛛鬼が累の家族になった後、蜘蛛鬼家族全員揃って、ボロボロで何も無いボウルを目の前に置き、ご飯を食べているふりをしているシーンがあった。これは蜘蛛鬼家族の家族関係の構成を明らかに表現したシーンだと考える。本来なら、家族全員揃って食事するシーンが数多くの作品では幸せで温かい意味を表している。しかし、蜘蛛鬼家族には違う。ボロボロで空いているボウルは蜘蛛鬼家族の「ただのままごと」の本質を暗示した。つまり、ままとの様子が無くなると、利益で結びつく家族の姿は隠せないまま、人に知られる。また、蜘蛛鬼たちが座っている順位について、父蜘蛛鬼は最

⁴ インドの修道女、「死を待つ人々の家」創始者、ノーベル平和賞受賞、1910～1997。

上位に座って、次は母蜘蛛鬼と兄弟姉妹の蜘蛛鬼。末の位置に座っているのは名義上の一番年下の弟の累である。これも家族の役割の配分の一つの表現である。側面から累は蜘蛛鬼たちが彼らの役割をこなすという要求を暗示した。

次は姉蜘蛛鬼に関することである。姉蜘蛛鬼が累の家族になる原因は、鬼狩りに殺されないように、累の保護をもらうことである。彼女は累の血を飲んで、累と似ている顔になった。姉蜘蛛鬼は累の血を飲まなければならない理由について、一つは累が自分に属する家族を作りたいので、彼の血を飲んだら自分と似ている蜘蛛鬼になれるということである。二つは累の理想的な家族を作るために、彼と血縁関係を持っているのは必要であるということである。累の意識では、彼の血を飲んで、顔が変わったら血縁関係を持つ家族になる。血縁関係があつてこそ、累を感動させた話のように、家族のために身を挺することができる。また、血を飲むことは累に意味があるだけでなく、血を飲む家族にも意味を持っている。累以外の蜘蛛鬼家族には、血を飲むことは強くなれるとみなされている。弱い鬼に対して、命を保証できることは一番優先されることである。つまり、姉蜘蛛鬼が累の血を飲んで、累の家族になるこのシーンも、累と累以外の蜘蛛鬼家族の家族が利益を交換している意味が含まれている。

家族を守るためにうろたえた炭治郎がいるなら、自分の利益を心配する姉蜘蛛鬼がいるのも自然なことである。姉蜘蛛鬼は累が禰豆子を家族にする考えを知った後うろたえた。どうして姉蜘蛛鬼はうろたえるのか、ここにも二つの理由があると考えられる。まずは、累が彼女のことを家族と思っていないことに気づいたことがある。この家族は家族愛で結びつく家族ではなく、利益で結ばれている家族のことである。姉蜘蛛鬼は累が禰豆子を奪おうと意識したあと、「私がお姉さんよ、姉さんを捨てないで」と言った。これは累を試している。その後、累は姉蜘蛛鬼が役割をこなせなかったと評価した。もう一つは、姉蜘蛛鬼が禰豆子からの脅威を意識したことである。万が一禰豆子は累の家族になると、姉蜘蛛鬼は累の「関心」を失い、存在は薄くなる。その事態になると、姉蜘蛛鬼の命は保証を失う。この二つの理由に基づいて、姉蜘蛛鬼はうろたえた。

次のシーンは、累が禰豆子を奪って、禰豆子を救いたい炭治郎が累と戦うシーンである。累に逆らいたい禰豆子は糸で縛って、血まみれになった。この場面を見た炭治郎はうろたえて、禰豆子を奪回したい気持ちは強くなった。この時の累はすでに禰豆子を自分の家族だと思ったが、彼は禰豆子を傷つけたとしても悲しくない。それに反して、炭治郎は妹を心配して、うろたえる状態に陥った。二人の態度は明らかな対比になった。累は昔の自分

とほかの家族との絆を結んだように、利益と恐怖で禰豆子と血縁関係を結ぼうと思った。しかし、炭治郎と禰豆子二人は家族愛で結ばれている家族である。累の感情がない家族観は二人の家族観と合わないことは、炭治郎が累の絆が偽物だと言える部分から分かる。これも二人が代表している二種類の家族観の衝突を深めるために作ったシーンと考えられる。愛を知らない累は自分の家族観を使って、別の家族観の中に育った炭治郎を傷つけ、二つの家族観はさらに対立する構造になっている。

また、累の家族観を認めない蜘蛛鬼がいた。それはA蜘蛛鬼のことである。A蜘蛛鬼の考えでは、この家族のことは血のつながりがない鬼同士のままごとである。A蜘蛛鬼にとって、累が母蜘蛛鬼を懲罰することは家族愛がないとことを意味する。また、事実から言えば、ある意味で累の蜘蛛鬼家族は血のつながりがある。しかし、ここのA蜘蛛鬼は血のつながりがないと言った。彼女が言いたいのは、この家族は血の繋がりがなくということではなく、足りないのは血の繋がり背後の意味である。言い換えれば、A蜘蛛鬼はこの鬼家族は本物の家族ではない、この家族で「家族愛」も感じなかった。彼女のこの考えは炭治郎の家族観と接近していると考えられる。

A蜘蛛鬼は、炭治郎と似ている家族観を持って、累の家族は本物の家族ではないと思った。しかし、累は自分の家族が本物の家族だと思う。累は姉蜘蛛鬼が自分の血を飲んで、家族の姿になったばかりの時、姉蜘蛛鬼に「おめでとう、これで本当の家族だ。」を言った。累の本物の家族についての定義は何か。累にとって、累の血を飲んで、彼と実際的な血の繋がりがあれば本物の家族になると考える。累の血を飲んだ後、累と顔が似ていない鬼は累の家族のような顔になり、使える技も累が代表している蜘蛛のスキルと同じになる。家族の絆を実現するには、血の繋がりは必要なことである。こうした結果、累は形式的な家族を得た。しかし、どうして累の家族は累と似ている顔や技を持ったなければならないのか。これは累が鬼になる前聞いた川で溺れた子供を助けて親が亡くなった話と関係する。累は川で死んだその親は、見事に「親の役目」を果たしたのだと思った。事実から言えば、この話の中の親は自分が確実に親としての役目を果たした。しかし、累が気づいたのは、その親の命かけて子供を救うという行為である。彼は親と子供の中に存在している家族の愛を気づいていなかった。ということで、累の家族観は愛の方向から離れ、利益を中心とする家族観の構築が始まった。

累が姉蜘蛛鬼を傷めつけている場面を見た炭治郎は、怯えずに当時の累が表現している絆が偽物だと言った。危うく累に殺されるところだった瞬間があっても、自分が言った話

も撤回しない。炭治郎の正直さは認められるべきであり、ここで注意すべきなのは、殺されるリスクを冒しても、累の歪んだ家族の絆を指摘することである。明らかに、炭治郎の意識の中に、彼が認識した「家族の絆」は自分の命より重要なものである。つまり、この二人の家族観は大きな違いがある。愛に囲まれた家族の中に育った炭治郎はいつも自分の家族を無条件で愛した。ゆえに、累の感情がない、利益中心とした家族モデルを接触した後、納得できない彼がどうしても自分の話を撤回しないことも理解できる。

そして、自分の家族観は侮辱されたと思う累は、炭治郎に話を撤回させろを言った部分も見過ごすべきところではないと考える。累の意識の中に、「仲間」の絆は「家族」より弱い、そして自分の絆は「仲間」の絆に思われた。これは彼を怒らせる理由の一つだと考える。もう一つの理由は、彼が作った絆は「偽物」と言われたこと。累の認識では、彼の絆は本物である。彼が本物であると思う理由は、累は自分の力を条件として、他の鬼と交換した後、家族を得た。この過程に、累と他の鬼はビジネスパートナーのように、利益交換を行った。累はそれを家族を作る手段として認識し、合理的な行動であると思った。つまり、彼のもう一つの怒る理由は、自分の意識で正真正銘の身分に思っている家族は「偽物」と言われたことである。

禰豆子は炭治郎を守るために手足が切られた場面の中に、もし禰豆子は鬼ではないなら、必ず障害者になり、あるいはその場で死ぬ。また、「鬼滅の刃」の中に鬼になった人は人間としての記憶をだんだん忘れになるという設定がある。つまり、禰豆子が一部の記憶が曖昧になったとしても、命をかけて人間である兄を救うことである。この場面もその場にいる累を感動させた。二人が表現している絆は彼がずっと求めている絆である。しかし、このような絆は愛で結ぶ絆の中によくある事だが、累はこれが愛から出発することを気付けなかった。また、累はこの絆を手に入れたという考えも昔のように、家族を奪うになった。

しかし、累と観念が違う炭治郎は大声で累を拒絶した。炭治郎は累の家族作り方と愛以外の手段で家族の絆を結ぶことに対して、信じられない気持ちを表現した。ここに示した二人の思想の違いは明らかであり、これは二人の思想の違いであると考えられる。炭治郎と累に対して、「累の妹を譲る話」と「炭治郎が累に彼の家族は偽物だと反論する話」は双方に効いた効果は同じである。二人は違い家族観を持って、または相手の家族観を認めないからこそ、衝突が起きる。

このように二人が戦っている時に、炭治郎は累を絶境に追い払って、相打ちになったと

しても累と戦う。ここの炭治郎はここの理由は何か。この疑問に対する第一印象は「家族なので、炭治郎は妹を必死に救うのも当然なことだ。」しかし、これは私たち自身が炭治郎と似ている家族観を持っているからこそ、このような行動を当然の事だと言える。炭治郎のこの決意をもっと深く分析すると、筆者は二つの理由が考える。一つは、この世に唯一な家族を失いたくないので、必死に戦った。もう一つは、炭治郎の家族観は妹と同じ、全部は「自分の命を捨てたとしても家族を守る」考え方を持っていて、故に炭治郎も妹を守るために命を捨られる。

累が鬼になっていらいずっと欲しがっていた家族の絆は、炭治郎と禰豆子のような命をかけて血を繋いでいる家族を救う絆である。しかし、累もかつてこんな絆を持っていたことがあった。鬼になって人を殺した累の罪を背負って、鬼の累を殺した後、累を追って死に行くつもりだった累の両親は、すでに累に殺された。自分の手で家族との絆を切った後、そのような絆は累の執念になった。那田蜘蛛山編の時間になるとき、累は家族の絆を作るために、利益の誘惑や恐怖の脅かすなどの手段しか使えない鬼になった。一般的な愛で結びつく家庭と違い、累は自身の目的のために、感情を捨て、利益と現実の角度から自分の家族を作った。現実にもたくさんの人たちは自身の利益のために、新しい家族を作ることがある。その人たちは累のような極端な行為をしていないが、彼たちは家族の感情がないまま家族になることは今現在の利益が複雑になる社会の中にも少なくないと考える。

5.2 「家族観」の再考

「家族観」という単語を言い出すと、人は常に自分の家族観を先に考える。人はどうやって自分の家族観を考えるのか。恐らく家族観を考える時、自分の家族を基準として家族観を構築することが多い。しかし、家族の形は砂のように数え切れないと考える。幸せな家庭は同じ形を持って、不幸な家庭は様々な不調和がある。世界中の家庭は様々な様式があり、違う家庭の中にいる人の家族観もそれぞれ違いを持っている。けれど、人々の家族観を大まかに分別すれば、愛を中心にする家族観の観念を持っている人数は必ず一位を取ることが予測できる。現代は自由恋愛を提唱し、自由恋愛を通じて恋人を愛し婚姻関係を取る人はますます多くなっている。つまり、互いを愛している理由で家族を作るとは普遍的なことになっている。普遍的なことになったと言う言い方を言い換えれば、このことは普遍的な認識になったと考える。

家族と言え、まずは血縁が繋いでいる愛が溢れる家族、完璧な家族と推測できる。し

かし、血がつながっていない、あるいは互いの間に愛がない場合になると、その人たちは家族になれないのか。それも違うと考える。家族関係について、血縁関係は唯一の関係ではない。養子や里親などの関係も家族関係として承認されている。しかし、その血縁関係も愛を基礎として構築している関係である。家族の間に愛がないと家族になれないのか。この答について、肯定的な態度を持つ人もいる、反対の態度を持つ人もいる。反対意見を持つ人の中に、「お金や権利のために家族になる人も必ず存在する」のような例をあげる人はいると考える。つまり、利益のために家族になることはあるが、そのような家族を認める人は愛で結ばれる家族を認める人より明らかに少ないことである。

利益で結ばれる家族は大部分の人の認めをもらえない理由について、筆者の考えでは、今現在の家族の定義に対する普遍的な認識は愛を持つことは一番重要なことである。だからこそ、愛と血縁関係がない利益で結ばれる家族を認めない人が少なくないと考える。しかし、愛を持つことは重要なこととして認識されている今、愛がない利益で結ばれる家族を認める人はどんな理由で、それを認めるのか。筆者自身は利益で結ばれる家族を家族として認めている一人として、このような家族の構成できる理由を考えた。

現在の社会では、一人でいい生活を送っている人はたくさんいるが、一人でいい生活を送れない人は更に多い。そして、いい生活を送れるように、互いに協力しあう利益で結ばれる家族は誕生した。つまり、家族のメンバーが自身の発展や利益を重視し、メリットをもらうためにほかのメリットをもらいたい人と家族を構築することである。ここの「いい生活」は人によって定義が違い、利益で結ばれる家族が一緒に集まれるのも、その人たちが求めている「いい生活」は相補性があると考ええる。

例えば、累の能力は強いが、彼は家族がない。そして、累は家族を欲しがるので、彼は自身の目的を達成するために、能力を交換のものとして、能力がいる鬼を待つ。ほかの鬼は累のような強さがないので、鬼殺隊に窮地に追い詰められる時になると、生き続けるために、累の家族になることを交換として自分を生き延ばせる力をもらうしかない。

筆者の考えでは、利益で結ばれた家族も家族の一種類である。累と彼の家族のような極端な利益で結ばれる家族ではないとしても、この家族の形は家族の一種として存続できると考える。論文の最初に書いている『逃げるは恥だが役に立つ』と『万引き家族』の例も利益で結ばれる家族の表現と考える。人はいつも様々な問題を解決しなければならない。婚姻問題、経済問題などの問題は解決しないと長い間に人の周りに存在している。多くの問題に追い詰め、それを応対するために、問題を解決できる人を探すのも、利益で結ばれ

る家族のメンバーの解決策として採用されている。愛で結ばれた家族ではないとしても、この家族の形も合理性を持っていると考える。

六、結論

以上の分析をふまえ、『鬼滅の刃—那田蜘蛛山編』に描かれた家族観についてまとめる。炭治郎の家族観は家族の間に互いを信頼し、強い絆でむすべければ、互いに全力を尽くして相手を守ることができる観念である。炭治郎の家族の形は血の繋がりがあある愛で結ばれた家族である。それに反して、累の家族観は、利益交換を通じて、累と血の繋がりがあある家族は彼を守る役割があるということである。累自身が思っている彼の家族の形は血の繋がりがあある恐怖で結ばれた家族が、実際的には、累の家族の形は血の繋がりがあない利益で結ばれた家族である。

愛で結ばれる家族と違い、累は自身の目的のために、感情を捨て、利益と現実の角度から自分の家庭を築いた。累の能力は強いが、彼には家族がなない。そして、累は家族を欲しがるので、彼は自身の目的を達成するために、能力を交換のものとして、能力が必要する鬼を待つ。ほかの鬼は累の強さがなないので、鬼殺隊に窮地に追い詰められる時になると、生き続けるために、累の家族になることを交換として自分を生き延ばせる力をもらうしかなない。

現実には自分の利益のために、新しい家族を作る人も多し。その人たちは累のような強い力を持ってなないが、それぞれのいいところがある。そして、あらゆる目的達成するために、新しい家族を構築する時が来ると、自分のいいところが相手にメリットをもたらし、相手の方から自分にメリットも提供出来れば、利益で結ばれる家族の構築は可能になる。このようなギブアンドテイクが達成できる上に、名義上の家族も得られる事は日々複雑になる社会の中に、部分の人が求めている事と考える。

七、参考文献

- [1]岡田怡川（1928）．『平易に解説したる文検国民道徳要領』文書堂．
- [2]上野千鶴子（1994）．『近代家族の成立と終焉』岩波書店．
- [3]苏七七（2018）．家庭的乌托邦—《小偷家族》中的“家庭”理念与图景『电影艺术』382(05)，60-62．
- [4]中臺希実（2015）．近松世話物から読み解く「家」存続と血縁優遇のジレンマ『比較家族史研究』2015（29），148-171．

[5] 諏訪淳一郎 (2022) . 『鬼滅の妖異学一人と鬼のあいだにあるもの』 勁草書房.

[6] 暴凤明 (2019) . 《小偷家族》的家庭自我认同意识重构『电影文学』2019 (23) , 134 - 136.

[7] 米村千代 (2014) . 『「家」を読む』 弘文堂.

八、参考映像

吾峠呼世晴 (2021) 『鬼滅の刃』 アニプレックス